沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.), №5，pp. 117－134，2012

資料紹介　染織資料Ⅵ－繻子地浮織物（繻珍）・綾地浮織物（蜀江文錦）－

小林　彩子[1)]　與那嶺一子[2)]

Material Note The Ⅵ Textile item *Shuchin・Nishiki*

Ayako KOBAYASHI[1)]　Ichiko YONAMINE[2)]

はじめに

近世琉球期から近代にかけて、琉球へ舶載された中国製とみられる染織品が、43件、当館に収蔵されている。

琉球と中国の関係は長く、先史時代から近代にかけての、遺物や史料がその密度の高さを物語っており、その関わりの中で、中国製の染織品を琉球がどのように捉えていたのかを考察する一助とするために、館蔵品の素材、模様、利用の様子を整理してみることにした。

当館所蔵の美術工芸及び歴史史料等にみられる布帛のうち、舶載染織品を、寄託品も含め、付表１にまとめた。これらは、①衣装・装身具として、身につけるもの、②紅型等の染物の基布として使われたもの、③典籍や書跡の装丁、または本紙として使われたもの、④染織品の裂に分類される。

今回は、繻子地浮織物（以下繻珍）(注1)、綾地浮子織物（以下蜀江文錦）の二例をまとめてみた。

収蔵している繻珍・蜀江文錦の概要

当館の繻珍・綾地錦（蜀江文錦）は下記の通りである。

ここで紹介する作品は、下記の12件で、その内訳は、寄贈６件、購入１件、寄託１件である。３件は返還である。また、美術工芸資料として管理されているものは９点（内、書跡資料１点、陶磁器資料１点を含む）で、歴史資料が３件25点である。

1　絹・金茶地龍文様唐織御王マントン（№1220）
2　絹浅地龍文様唐フィーター（№1889）
3　龍瑞雲青海立波文唐織衣裳（№6240）
4　黒地龍文貼付帯（№6281）
5　金茶地龍瑞雲模様繻珍衣裳（№13967）
6　青地龍模様繻珍裂
7　朱珍帯（寄託：沖縄県立図書館）
8　独楽型茶入（№1837）の仕覆
9　尚育王書軸物「五言絶句」の表装裂（№2102）
10　中山世鑑（№966）
11　蔡鐸本中山世譜（№967）
12　蔡温本中山世譜（№968）

これらの染織品の旧蔵者及び、当館に入った経緯等について、簡単にまとめておく。

資料１（№1220）は、横浜市鶴見区に在住の森松長光より寄贈された。1954年３月６日付けで首里博物館長から文教局長宛に出された美術工藝御寄贈の件と標題の文書（琉博発第十二号）には「双龍金襴唐御衣裳　壹枚　但琉球王の着用せし皮辨服（うまんとん）を改造せしものと思料される　時價二萬円」とあり、寄贈者として森松と沖縄教職員会事務局長の新里□篤の名が記されている。

資料２（№1889）は、第二尚氏19代国王尚泰の五女八重子の夫である神山政良（1882～1978）によって、1959年寄贈されたものである。当時の新聞に「尚泰公のヒイター　冊封使接待時のドンス　神山氏が寄贈」（1959年５月１日　沖縄タイムス）の見出しで寄贈の経緯が述べられている。

資料３（№6240）、資料４（№6281）は、尚家21代当主尚昌（1888～1923／尚泰の孫）の長女文子（1917

1) 文化庁 美術学芸課　〒100-8959 東京都千代田区霞が関3－2－2
Agency for Cultural Affairs of Japanese Government, 3-2-2, kasumigaseki Chiyoda-ku, Tokyo, 100-8959 Japan
2) 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3－1－1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

～2004）から1980年に寄贈されている。井伊家に嫁ぐ際（1937年）に、沖縄の祖母（野嵩御殿）から送られてきたもので、資料３について、自著で「(国王の）礼装用のウマントンの着物」と述べている〔1〕。

資料５（№13967）は、戦前に首里で骨董商を営んでいた大嶺家の旧蔵品である。寄贈者の姑である大嶺カメ（1865年生）から王妃衣装として大切に保管するように伝えられていたようである。

資料６（№仮230307）の青地龍模様繻珍裂は、2011年３月付で寄贈された。服飾研究家の鯨岡阿美子（1922～1988）の旧蔵品だが、由来の詳細は不明である。近世において、繻珍を含めた中国製の絹織物は、琉球、蝦夷（松前藩）、長崎、朝鮮（対馬藩）の４ヶ所から入手が可能であったが、この資料がそのいずれに該当するのか、今のところ分からない。

資料８（№1837）の茶入れは尚順（1873～1945／尚泰第四王子）の旧蔵品である。

資料９（№2102）は、第二尚氏第18代国王尚育が揮毫した書跡であるが、その表装裂が繻珍による蜀江文である。寄贈者及び経緯については、よく分からない。

また、資料10（№966）・11（№967）・12（№968）の『中山世鑑』、『中山世譜』は琉球の正史として、戦災に遭うまで、中城御殿（現　那覇市首里大中町１－１）に保管されていた。終戦時に米国に持ち去られていたが、日系移民関係者の尽力により1953年米国政府より返還された。

沖縄県立図書館より1974年から受託している帯（資料７）は、東恩納寛惇（1882～1963）が旧蔵していたもので、帯には「浦添御殿」と記された和紙の札が付いている。

琉球と中国の関係について

琉球と中国においてモノと人が行き来した歴史は、先史時代の遺物に始まり、現代まで続いており、その影響は大きいといえるが、染織品の様子が明らかになるのは、『歴代宝案』や『朝鮮王朝実録』などの史料に記される明代からとなる。

中国から渡来した染織品は、下記の二通りある。

① 冊封によって拝領したもの

② 福建の琉球館で中国人との商いによるもの

中国皇帝から頒賜された染織品の内容は、下記のように、時代を追って変化する。

第二尚氏王統の第一代尚円は、五章絹地紗皮弁服、大紅素皮弁服、大紅織金胸背麒麟（円領）、苧絲織金胸背麒麟（一匹）、苧絲織金胸背白澤（一匹）、羅織金胸背麒麟（一匹）羅織金胸背獅子大紅（一匹）などを頒賜され、皮弁服は、仕立てられた明服であったことが読み取れる〔2〕。最後の国王、第19代尚泰が1866年に同治帝から頒賜された品は、蟒緞二疋、粧緞二疋、青緞二疋、字緞六疋、藍緞三疋、錦三疋、紗四疋、羅四疋、紡絲四疋で、反物である。明朝から清朝へ変わったことにより、明服の頒贈から反物へと変わり、麒麟、白澤、獅子といった文様も、蟒のみとなる。〔3〕。

中国商人と取引された染織品は、薄物の絹織物から厚物の羅紗など様々あり、琉球国内では、王族、士族の官服における色衣や帯、冠（ハチマチ）など衣裳類や、調度品などに利用され、その一部が現存している。さらにこれらの舶載染織品を琉球は外交に活用する。江戸に向かう使者の献上品には、縮緬、羅紗、緞子、白花紗綾などの絹織物がみられる〔4〕。また、薩摩、島津家が敬姫の輿入れにあたり、琉球を介して蘇州の絹織物を調達しようとした事例もある〔5〕。さらに、薩摩藩は羅紗などの毛織物を長崎会所にて琉球産物として売りさばいていた事例もあり〔6・7〕、鎖国を続ける日本国内での需要に、琉球からの染織品が供していたのである。

琉球王国が解体した後は、その状況が一変する。これまで、福州経路で入ってきた「広東繻子紋純子綸子紗緩五ツ爪紋縮緬白縮緬紗呉服絽ヒツチジヨン、サイヤンフ、キヤシフ、ケンチユ、阿南繕、大田繕（蚊帳地）トンヒヤンチエー」等の染織品が、直輸入の道を閉ざされ、入手に苦慮している様子が、明治33年の新聞にみられる〔8〕。

資料調査の方法とその考察

当館の所蔵品は、素材、織り技法を確認し、織り密度の計測、資料の採寸を行った。写真は、全体を撮影し、マイクロスコープで25倍、50倍、100倍、175倍に拡大撮影した。掲載写真は50倍のものである。

織りの密度は、１㎝間における経糸、緯糸の本数であるが、１㎜間に経糸10～12本と、肉眼による計測が難しく、厳密なものではないので、参考程度と考えて欲しい。

資料名称は、現在、収蔵品原簿の台帳に記載され

ているとおりとした。（　）内は調査時に付した名称である。

素材、織り技法、考察は小林が担当し、計測、作図、写真は與那嶺が担当した。

〔繻珍作例の概要〕

今回調査した繻珍は、衣裳が４領（資料１、２、３、５）、帯が２筋（資料４、７）、裂が１枚（資料６）、仕覆が１点（資料８）、表装裂が１点（資料９）の計９件である。

衣裳は、明時代末から清時代に織製されたと考えられる龍袍の裂を用いて仕立てたものである。４領のうち、資料１と５は、垂領、広袖の衣裳、資料２は上衣、資料３は外套に仕立てる。これら４領の衣裳に用いられている裂は、経７枚繻子地に絵緯糸(注2)を織り入れて文様を表した繻珍である。絵緯糸は撚りのかからない平糸で、多色の色糸と金糸を用いる。金糸は、部分的に平金糸を用いている（資料１）が、ほかは紙胎に貼り付けた金箔を巻いた撚金糸である。この撚金糸２本を一揃えで織り入れ、地絡で押さえている点が特徴的である。文様は多少の差違があるものの、五爪龍、雲文、海水江崖、宝珠などを表した典型的な龍袍の文様である。資料１は胸と背を半円状、裾を帯状の文様帯とするが、その他の衣裳は全面に文様が施されている。また、資料６は衣裳用の裂で、資料１～３、５と文様が類似するが、文様部分にのみ絵緯糸を織り入れた縫取織である。

帯は清時代に織製されたと考えられる裂を用いる。資料４は、帯の裂とは異なる裂の文様部分を切り取り、縫い付ける。資料７は、琉装用の仕立帯である。衣裳と同じく、撚金糸２本を一揃えで織り入れ、地絡で押さえている点が特徴的である。

資料８は仕覆裂であるが、久米島喜久村家所蔵の大帯（18世紀）、東任鐸画像（19世紀）(注3)に描かれる帯と文様が極めて類似する。本仕覆の文様幅からは、東任鐸の帯幅が約17センチメートルと推測できる。本仕覆も帯に用いられた裂の可能性が考えられる。

資料９は、次掲の錦と同じ文様であるが、地組織が異なる。本裂は、第18代琉球国王である尚育の書の表装裂である。本裂以外は新しく調製された裂を用いているが、修理などによる改装がなされたかは不明である。

これらの繻珍は、製作当初の用途とは異なる形状のものも含まれるが、特に旧家に関わる裂として、琉球染織や中国との係わりを考える上で貴重な資料であろう。

〔蜀江文錦作例の概要〕

資料10～12は、昭和31年12月14日沖縄県指定有形文化財（典籍）に指定された。資料10は、羽地朝秀（向象賢・1617～1675）が1650年に王命により編集した琉球王府正史である。それに続く正史として、蔡鐸が漢訳補訂し、1697～1701年にかけて編集したものが資料11であり、さらに蔡鐸の後を受けて、蔡温が編集、書き継いだのが資料12である。

いずれも経３枚綾地に絵緯糸と金糸を織り込んで文様を表した錦を表装裂とする。詳細は不明であるが修理されており、1974年には、当館で洗浄を行っている。資料12の一部には補修の跡があり、同裂の断片も別途保存されている。

これらの表装裂は、清時代（18－19世紀）のものと考えられる。円形花文を中心に四角形、八角形を組み合わせた文様を織り表した錦は、清時代以前から用いられている文様であるが、清時代乾隆年間（1736～95）の遺品の中で、四合如意天花、天花、四合天花などと呼ばれる文様の錦裂と同系統と考えられる〔10〕。

三史書の表装は、『中山世鑑』を継ぐもの、あるいは正史として、同文様、同種の裂としたのであろうか。資料９も含め、繻子組織でも類似する文様が見られるほか、後述の通り、御後絵にも同文様が描かれ、王家に関するものに用いられている文様として興味深い。

おわりに

繻珍は、８例のうち４例が王家関係または御殿と呼ばれる士族の遺品である。これらが総て頒賜品とは言えないが、金糸、銀糸で織られた豪華な中国から渡ってきた染織品は、利用が高位の者に限られていたことが、これからも見てとれる。

王国時代、王衣裳は、唐御衣裳と呼ばれ、「金入竜紋緞子」の反物または「緞子竜紋貫付」で仕立てられ、使用後の裂（御切）は、寸法を記載し王府内で保管されていた〔11〕。

資料１と資料５は、二種類以上の龍文の繻珍が使われており、王府内に保管されていた裂が活用されたと思われる。これらの龍文の繻珍裂は、近代に入ると、尚泰の娘、孫、曾孫の嫁入りに、和装小物等に形を変えて使われている。

当館収蔵品の蜀江文錦には、繻子地（資料９）と綾地（資料10、11、12）がある。繻子地の作例は、国宝「琉球国王尚家関係資料」のうち「赤地龍嶮山文様繻珍唐衣装」（衿下、袖口、裾廻り）、「石帯」に見られる〔12〕。現存していないが王装束の「膝当」（藍地）、「御足袋」の縁部分（茶地ヵ）にも使われている〔13〕。繻子地は王装束に、綾地は正史のための表装裂として使われており、織り方によって使用例を違えていたかどうか、今後の研究課題である。

蜀江文は、国王の御後絵や肖像画に描かれる幕や掛け物、衣裳に、その利用の様子が確認できる〔13〕。尚貞王御後絵（在位1669～1790）には、幕や椅子の掛け物に使われており、王装束の裾や袖口に見られるのは尚敬王（在位1713～51）代からである。

この他、尚純公肖像画、銘苅子肖像画〔13〕に描かれる帯、程順則肖像画では椅子の掛け物が蜀江文である。しかし、残念なことにこれらがどのような技法によるものか、絵からは判明できない。また、道光六年、知念筑登之親雲上が調えたことを記銘した紅型型紙に蜀江文が一例ある。紅型衣装としての作例は現存せず、表装裂や掛け物などの用途が考えられる。

海水江崖文は、国王「琉球国王尚家関係資料」の紅型衣裳の裾に染められている例があり、琉球において、錦織物の文様をどのように捉えていたかを考える意味で興味深い。

今後、別資料も含め、舶載染織品の整理を進め、その需要と影響について研究をすすめてみたい。

注

（１）本稿では、地糸とは別に紋糸を加え、紋糸を部分的に浮かせた紋織物を指し、広義の浮織物をいう。

（２）絵緯糸は、文様部分にのみ織り入れる絵緯と、織幅一杯の通し糸として織り入れる紋緯と区別する場合があるが、本稿では文様を表すために用いられる、地緯ではない緯糸をいう。

（３）東任鐸画像については、本紀要の早瀬千明著『近世琉球の肖像画とその背景についての試論』を参照のこと。

参考文献

〔１〕井伊文子『拂桑花の念い』平成９年
〔２〕『歴代宝案　訳注本第１冊』沖縄県教育委員会　1994年
〔３〕『趙新・于光甲　「続琉球国史略」（1882年の発行か）・郷土史講座テキスト本（木版影印本）』　沖縄県立図書館　1979年
〔４〕『江戸立付献上進上物萬総帳扣』（那覇市歴史博物館蔵）
〔５〕上江洲安亨「現存する絹織物資料からみた中琉貿易史」
〔６〕上原兼善「九州大学文化史研究所蔵琉球関係史料の研究」平成７年
〔７〕小笠原小枝・石井千尋「紅毛船唐船琉球差物端物切本帳について」『ＭＵＳＥＵＭ』東京国立博物館　1989年
〔８〕『沖縄県史　資料編５　染織関係近代新聞資料　技術１』沖縄県教育委員会1997年
〔９〕『沖縄の文化財Ⅲ　有形文化財編』沖縄県立教育委員会　平成７年
〔10〕『中国絲綢科技芸術七千年-歴代織繡珍品研究』黄 能馥、陳 娟娟著　中国紡織出版社　2002年12月
〔11〕『那覇市史　資料篇第１巻10　琉球資料（上）』那覇市役所　平成９年
〔12〕『尚家関係資料総合調査報告書Ⅱ　美術工芸編』那覇市　平成19年
〔13〕鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店　1982年
●『尚王家と琉球の美』　MOA 美術館　2001年10月26日
●『明・清朝　宮廷衣裳　桃源洞テキスタイル・コレクション』鈴木三八子、澤田絹子著　日本織物文化研究会
●「故宮博物院に残る染色～中国・琉球の交流をみる～」與那嶺一子　沖縄県立博物館・美術館　2008年11月１日
●『沖縄織物の研究』田中俊雄・田中玲子　紫紅社　1976

所蔵品一覧　凡例

- 沖縄県立博物館・美術館が所蔵する中国染織品の一覧である。
- 琉球王国時代から近代までの作例をまとめた。
- 絹・木綿等の平織は、中国産との判断が難しいため、割愛した。
- サイズの単位はcm とした。
- 資料名称は、沖縄県立博物館・美術館の収蔵品原簿の登記名称とした。

所蔵品解説　凡例

- 掲載する資料は沖縄県立博物館・美術館に収蔵および寄託されている繻珍、蜀江文錦である。
- 資料名称は、収蔵品原簿に記載されている通りとし、（　）内は調査時に付した名称である。
- 寸法は衣裳の場合は、丈・裄で示し、帯や裂は幅、長さ、又は縦、横を示した。冊子は縦、横を示した。単位はcm。
- 織り密度は、１cm 間の経糸、緯糸の本数である。

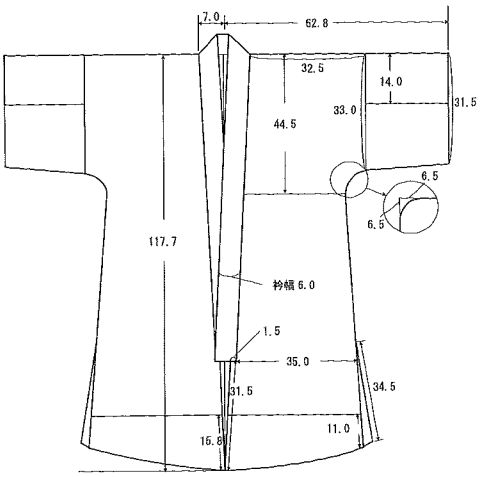
（付表１）当館所蔵の中国より舶載された染織品の一覧

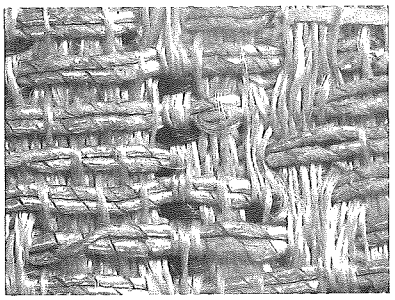
＊○は今回の報告対象

No.	登記番号	分野	資料名称	数量	寸法	主な素材	受入年月日	受入次第	備考
1	345	染織	絹・浅地支那服	1	丈 73.0 裄 22.0	絹（綸子）	1952 年 4 月	収集	
2	412	染織	木綿朱地唐ビーター	1	丈 89.0 裄 65.0	羊毛（綾織）	1952 年	寄贈	
3	473	染織	絹朱地胴衣	1	丈 102.0 裄 66.5	絹（平織）	1952 年	寄贈	
4	1004	染織	絹浅地籬に菊萩桜文様紅型胴衣	1	丈 87.5 裄 75.0	表：絹（絽織）	1953 年	寄贈	
5	1220	染織	絹・金茶地龍文唐織御王マントン	1	丈 119.0 裄 61.0	絹（繻珍）2 種	1954 年 3 月	寄贈	○
6	1601	染織	絹柿色地胴衣	1	丈 87.0 裄 72.0	絹（絽織）	1955 年	購入	
7	1602	染織	絹浅地楓に花の丸文様胴衣	1	丈 88.0 裄 61.0	表：絹（縮緬）	1955 年	購入	
8	1889	染織	絹・浅地龍文様唐フィーター	1	丈 83.0 裄 50.0	表：絹（繻珍）	1959 年 6 月	寄贈	○
9	6240	染織	龍瑞雲青海立波文唐織衣裳	1	丈 123.5 裄 65.0	表：絹（繻珍）	1980 年 12 月	寄贈	○
10	6281	染織	黒地龍文貼付帯	1	長 343.0 幅 31.5	絹（繻珍）	1980 年	寄贈	○
11	2195	染織	冠裂	1	長 27.0 幅 42.8	絹（平地緯浮）	1961 年	寄贈	
12	8953	染織	男物帯	1	長 155.0 幅 15.3	絹（緞子）	1983 年 5 月	購入	
13	9044	染織	男物帯	1	長 114.8 幅 15.0	絹（綸子）	1984 年 3 月	寄贈	
14	9045	染織	唐服	1	丈 92.0 裄 57.0	絹（綸子）	1984 年 3 月	寄贈	
15	13967	染織	金茶地龍瑞雲模様繻珍衣裳	1	丈 134.0 裄 61.0 か	絹（繻珍）4 種	1993 年 3 月	寄贈	○
16	14136	染織	絹薄茶地流水に菊文様胴衣	1	丈 82.5 裄 72.0	表：絹（綸子）	1994 年 3 月	寄贈	
17	14994	染織	絹黄色地浮織裂	1	縦 21.4 横 7	絹（錦）	1995 年 5 月	購入	
18	15941	染織	唐フィーター	1	丈 60.0 裄 46.0	木綿（平地綾文）		寄贈	
19	230307(仮)	染織	青地龍瑞雲嶮山模様繻珍裂	1	巾 75.0	絹（繻珍）	2011 年 3 月	寄贈	○
20	寄託	染織	朱珍帯	1	幅 17.5 長 197.0	絹（繻珍）	1974 年 8 月	寄託	○
21	寄託	染織	緞子袷	1	丈 12.0 裄 64.5	絹（緞子）		寄託	
22	ＳＥ 012	染織	浅地紅型風呂敷	1	縦 115.7 横 117.5	絹（平地綾文）		学芸資料	
23	1837	陶磁器	独楽型茶入の仕覆	1	縦 8.5 径 5.0	絹（繻珍）	1958 年 6 月	購入	○
24	2	書跡	尚育王書	1	本紙縦 100 横 50.5	絹（繻子）	1947 年 4 月	収集	
25	1307	書跡	尚温王書軸「寿」	1	本紙縦 77.5 横 49.8	絹（繻子）	1954 年 4 月	購入	
26	2047	書跡	鄭嘉訓書扁額	1	本紙縦 52.5 横 52.6	絹（綸子）	1960 年	購入	
27	2102	書跡	尚育王書軸物「五言絶句」の表装裂	1	本紙縦 132.0 横 54.5	絹（繻珍か）	1961 年 3 月	寄贈	○
28	5033	書跡	徐葆光書軸（隷書）	1	本紙縦 139.5 横 73.0	絹（繻子）	1978 年 3 月	購入	
29	7077	書跡	中山尚慎書「梅花」	1	本紙縦 68.9 横 66.2	絹（繻子）	1981 年 4 月	購入	
30	8776	書跡	汪楫書軸物「七言絶句」	1	本紙縦 136.7 横 39.3	絹（繻子）	1982 年 5 月	購入	
31	9121	書跡	林麟焻「七言絶句」	1	本紙縦 111.8 横 37.8	絹（繻子）	1984 年 4 月	購入	
32	9462	書跡	全魁書	1	本紙縦 114.4 横 49.6	絹（繻子）	1984 年 3 月	寄贈	
33	9468	書跡	尚育王書	1	本紙縦 67.8 横 47.4	絹（繻子）	1984 年 3 月	寄贈	
34	9475	書跡	程順則書	1	本紙縦 44.0 横 343.5	絹（繻子）	1984 年 3 月	寄贈	
35	13991	書跡	程順則「聖諭」	1	本紙縦 44.0 横 50.0	絹（繻子）	1993 年 3 月	寄贈	
36	17435	書跡	徐葆光書「七言絶句」	1	本紙縦 94.2 横 40.0	絹（繻子）	2000 年 1 月	寄贈	
37	966	歴史	中山世鑑	6	縦 30.5 横 21.2	絹（錦）	1953 年	返還	○
38	967	歴史	蔡鐸本中山世譜	7	縦 30.5 横 21.2	絹（錦）	1953 年	返還	○
39	978	歴史	蔡温本中山世譜	12	縦 31.0 横 21.2	絹（錦）	1953 年	返還	○
40	1291	歴史	赤ハチマチ	1	奥行 19.3 高 12.5	絹（縮緬）	1954 年	購入	
41	2365	歴史	黄ハチマチ	1	幅 16.0 奥行 18.0 高 7.5	絹（綸子）	1965 年 6 月	寄贈	
42	寄託	歴史	朱ハチマチ	1	幅 18.0 奥行 21.0 高 7.5	絹（平地浮織）	1974 年 8 月	寄託	
43	寄託	歴史	黄ハチマチ	1	幅 18.0 奥行 19.7	絹（綸子）	1974 年 8 月	寄託	

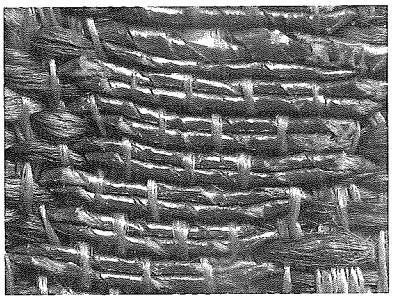
1　絹・金茶地龍文様唐織御王マントン（金茶地双龍文様衣裳（ウマントゥン））

登記番号：1220
受 入 年：1954年３月
受理次第：寄贈（森松長光・横浜市在）
寸　　法：丈117.7　裄62.8
表地素材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙、平金紙）
織 技 法：表地　７枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：表地（身頃・袖）経120、緯40（ヵ）
　　表地（衿）経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪龍、彩雲、如意雲、海水江崖、火炎宝珠





表地（身頃）
拡大（50倍）



表地（衿）
拡大（50倍）

表地は２種類の裂を用い、身頃と袖は、経７枚繻子地に地緯１越毎に絵緯糸を織り入れて地絡で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、浅葱、紺、縹、濃緑、黄、薄茶、鶸、紅の平糸を用い、龍の鱗には、撚金糸と撚銀糸を地絡で全越（地緯１越おき）に織り入れる。撚金銀糸は、紙胎に金銀箔を貼り付ける。金糸は赤、銀糸は白絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。文様の輪郭や絵緯糸と絵緯糸の間に平金糸を全越に織り入れる。また、裾の文様裂の縫い合わせ部分に、２～３本の平金糸が織り入れられているが、現状は落下している箇所がある。平金糸は、紙胎に金箔を貼り付けたものである。

衿には、経７枚紅繻子地に地緯２越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍を用いる。絵緯糸には、白、浅葱、青、萌黄、緑、薄茶、鶸、赤茶の平糸を用いる。撚銀糸を地絡で半越に、２本一揃えで織り入れる。撚銀糸は紙胎に銀箔を貼り付けたもので、赤の絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。

裏地は、２種類の紗を用いる。身頃と袖には、平織地に２本捩りで円龍文（ヵ）を表した顕紋紗、身頃両脇部分には、２本捩り織地に平織で円龍文（ヵ）を表した透紋紗を用いる。

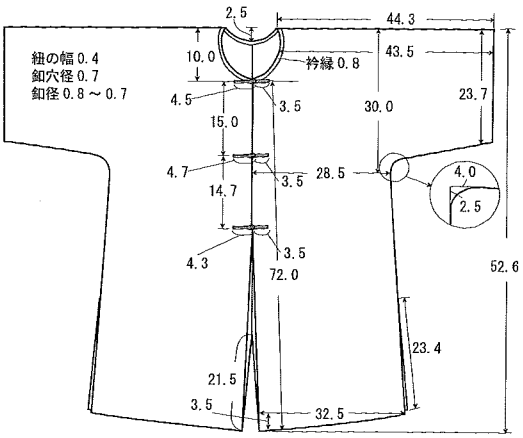
袷仕立て。袖は広袖。衿は別裂を用いる。両脇にスリットが入っており、あき止まりには１cmほどの紺組紐をわたす。前身頃は衿のみが重なり合い、うち合わせが少ない。裾は緩やかな曲線となる。

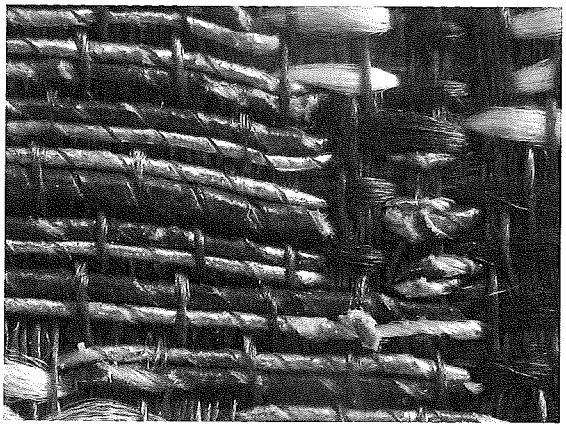
金糸２種と銀糸を部分的に使い分け、文様表現に工夫が見られる。文様は、火焔宝珠を挟んで２匹の龍が向かい合い、その上方に雲を、下方に剣山と波濤を表したもので、今回調査した他の衣裳とは異なる龍文である。両肩から胸にかけてと裾廻りに文様を配し、清時代に見られる衣裳全面に文様を表した総模様とは趣を異にする。

明末から清時代の裂を生かした衣裳である。仕立ては明、清時代のそれとは袖や衿などが異なり、琉球独自のものであると考えられるが、脇下や裾の曲線などは当初を生かした仕立てと考えられる。背中心に文様のずれや接ぎ合わせが見られる。

2　絹・浅地龍文様唐フィーター

登記番号：1889
受 入 年：1959年
受理次第：寄贈（神山政良・東京在）
寸　　法：丈83.5　裄49.3
布　　幅：52.6（ヵ）
表地素材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙）
織 技 法：表地　７枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：表地　経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪龍（背中心は正面龍）、コウモリ、彩雲、菊折枝、花折枝（撫子か）、火炎宝珠





表地拡大（50倍）

表地は、経７枚繻子地に地緯１越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、浅葱、青、萌黄、緑、黄赤の平糸を用いる。文様の一部には、撚金糸を地絡で全越に、２本一揃えで織り入れる。金糸は紙胎に金箔を貼り付ける。白の絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。

裏地には、紅平絹地に花楕円紋（紋丈10.8／幅16.5／窠間幅20.8）を経４枚綾で織り出した紗綾と、袖口裏は紅縮緬の２種類の裂を用いる。

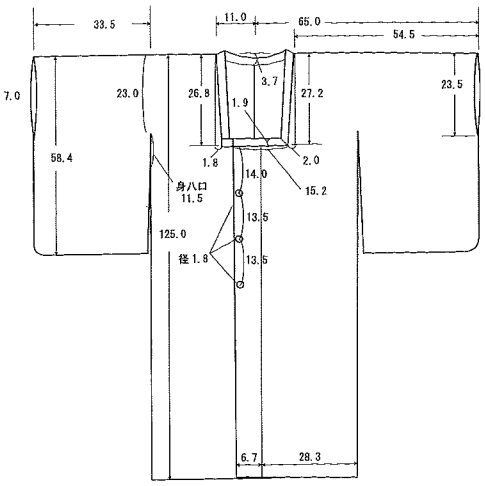
袷仕立。丸首。袖幅が短い筒袖。前中心あきとし、身頃と同じ裂で作ったトンボ頭の留め紐と受緒を３箇所に縫い付ける。両脇裾にスリット、背中心裾に背割れを設ける。両脇、背中心のあき止まりには、約１cm の同色の組紐を渡す。あき止まりの方法は資料１と同じである。裾は緩やかな曲線となる。文様は、背面中央の正面を向いた龍の下方に、正龍を仰ぎ見る２匹の龍を表し、上方に雲を、下方に剣山と波濤を表す。袖肩山には、正龍を左右それぞれ１匹表す。龍文の間に蝙蝠や雲、花折枝文を表す。前右身頃には肩以外に文様はない。

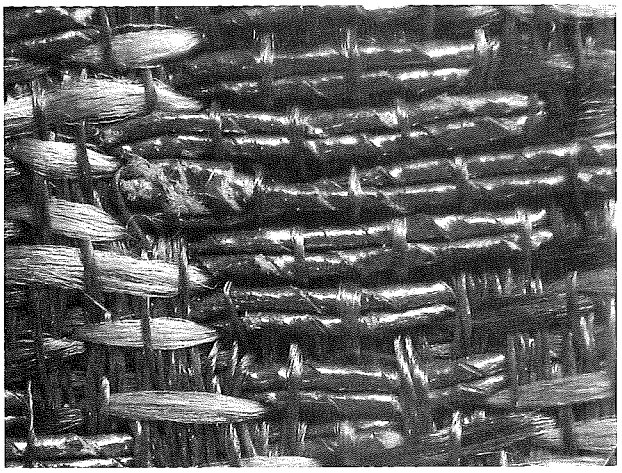
清時代の裂を生かして丈の短い外套（唐フィーター）に仕立てる。フィーター（フィター）は寒い日などに着用したボタンのついている外套である。上衣のため、動きやすいように両脇と背にスリットが入る。右前身頃にほとんど文様がないことや、裾部分の模様が途切れていることから、元々の裂は龍袍用に織られたものであろう。

神山八重子（尚泰五女）が、嫁入りの際に持参したものか。尚泰が愛用したと伝わる。

3　龍瑞雲青海波立波文唐織衣裳（青地龍文様繻珍道行）

登記番号：6240
受 入 年：1980年２月
受理次第：寄贈（井伊文子・彦根市在）
寸　　法：丈123.5　裄65.0
布　　幅：64.5以上（ヵ）
表地素材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙）
織 技 法：表地　７枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：表地　経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪龍（正面龍）、彩雲、海水江崖、蝙蝠、菊折枝、花折枝（撫子か）、火焔宝珠、宝珠、法螺、方勝、天蓋、双魚





表地拡大（50倍）

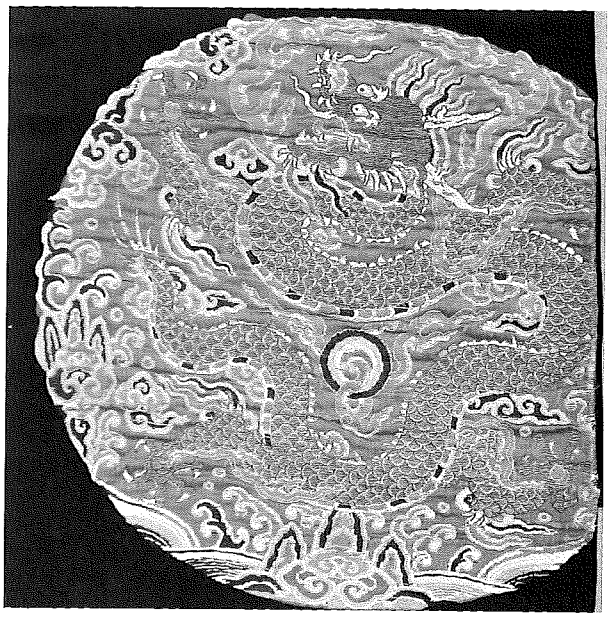
表地は、経７枚繻子地に地緯２越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、浅葱、紺、赤、薄黄、黄、金茶、萌黄、緑の平糸を用いる。龍や文様の一部に撚金糸を地絡で半越に、２本一揃えで織り入れる。金糸は紙胎に金箔を貼り付け、白の絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。

裏地は、ピンクのぼかしが入った白地草花文モスリンを用いる。

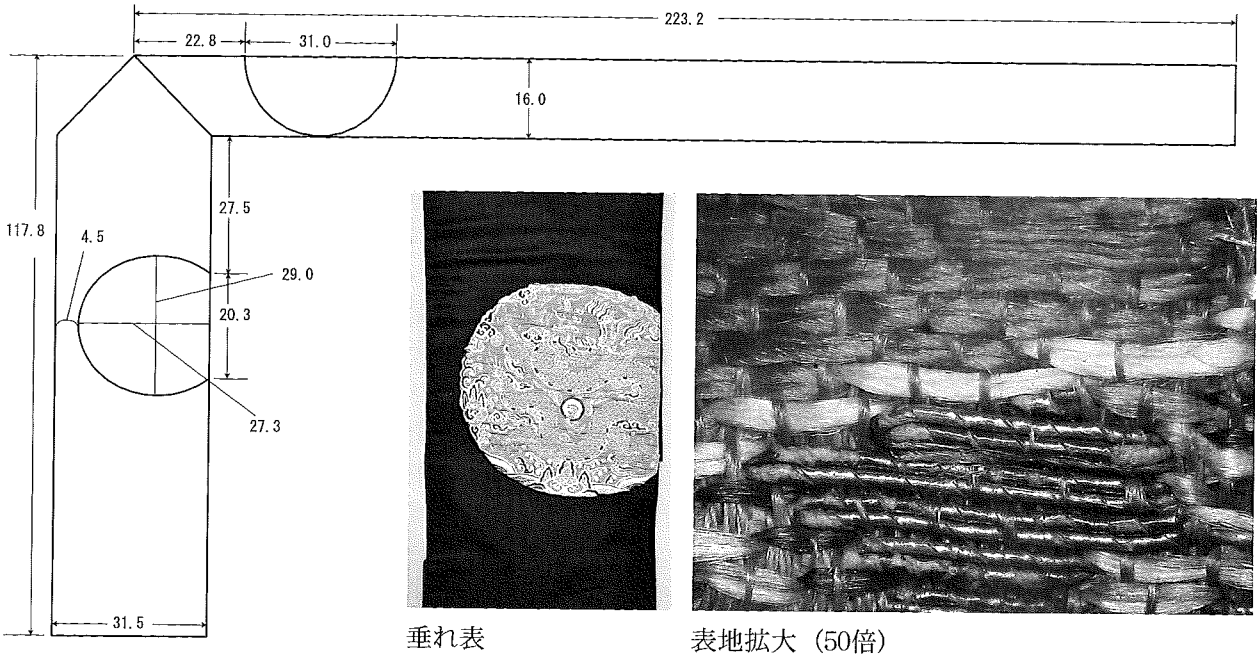
袷仕立。道行衿。背中心裏の衿付け部分に高島屋のタグが縫い付けられていることから、高島屋に裂地を持ち込み、仕立てたことが考えられる。ボタンは３カ所で、表には同裂のくるみボタンを飾りで付け、上前と下前は凹凸で留めるスナップボタンとする。文様は、背面中央の正面を向いた龍の下方に、正龍を仰ぎ見る２匹の龍を表している。両前袖肩部分に正龍をそれぞれ１匹表す。龍文の間に蝙蝠や雲、花折枝文を表すほか、天蓋の下に金魚、法螺や方勝などの吉祥文様も表す。

清時代の裂を生かして仕立てた、丈の長い和装用の道行コートである。表地には、龍袍用の裂を使用しているが、色味や金糸の様子などから時代が下るものと考えられる。伊井文子（尚泰曾孫）の御婚礼時（1972年）に譲渡された衣裳を、後にコートへ仕立て直したものと伝えられる。

4　黒地龍文貼付帯（黒地龍文様帯）



登記番号：6281
受 入 年：1980年
受理次第：寄贈（井伊文子・彦根市在）
寸　　法：長343.0　垂れの幅31.5
素　　材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙、平金紙）
織 技 法：文様部分　５枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：文様部分　経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪龍、如意雲、海水江崖、火焔宝珠



垂れ表

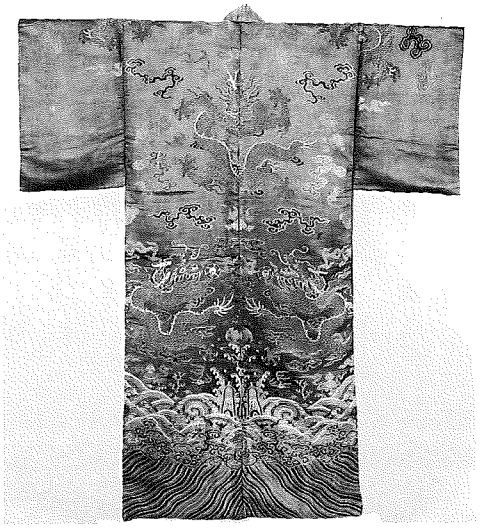
表地拡大（50倍）

表は黒繻子地。垂れと手先の２箇所に円文を切り付ける。円文は、経５枚繻子地に地緯１越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍である。絵緯糸は白、緑、黄、紺、浅葱の平糸を用いる。文様の一部に、撚金糸（銀糸も併用か）を地絡で全越に、２本一揃えで織り入れる。金糸は紙胎に金箔を貼り付ける。白の絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。文様裂を縫い付けた箇所は、文様の部分毎に似た色糸を用いて縁を補う。

文様は、側面を向き、火焔宝珠を抱くように体を丸めた龍文を中心とし、龍の下方には剣山と波濤、円周には如意文を表す。清時代と考えられる裂の一部を縫い付けた帯である。文様が円形に収まっており、貴人が着用する外套の円形文を使用したと考えられるが詳細は不明である。

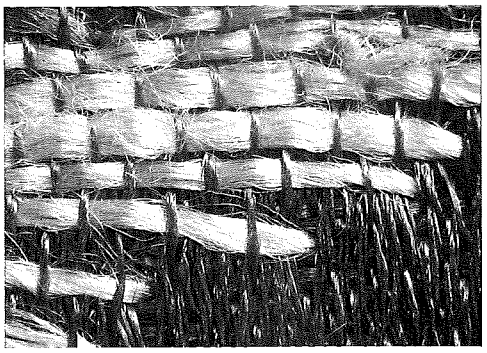
帯の形状は名古屋帯である。名古屋帯は大正期に創出され、昭和初期に全国に広まった。井伊文子が作らせたと考えられる。

5　金茶地龍瑞雲模様繻珍衣裳（金茶地龍文様繻珍衣裳）

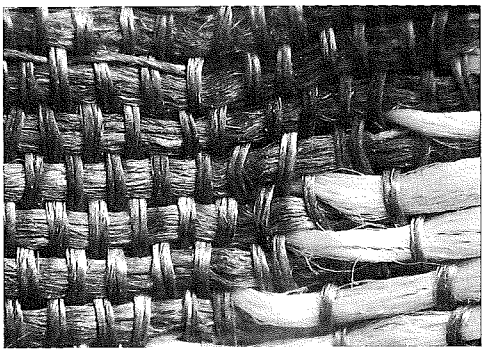


登記番号：13967
受 入 年：1993年３月
受理次第：寄贈（大嶺チヨ・東京都在）
寸　　法：丈134.0　裄61.0
身頃素材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙、平金紙）
織 技 法：表地(身頃)　５枚繻子地浮織(繻珍)
織 密 度：表地(身頃)　経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪龍、コウモリ、彩雲、海水江崖、
　　菊折枝、花折枝、火炎宝珠、宝珠、
　　法螺、銭、珊瑚

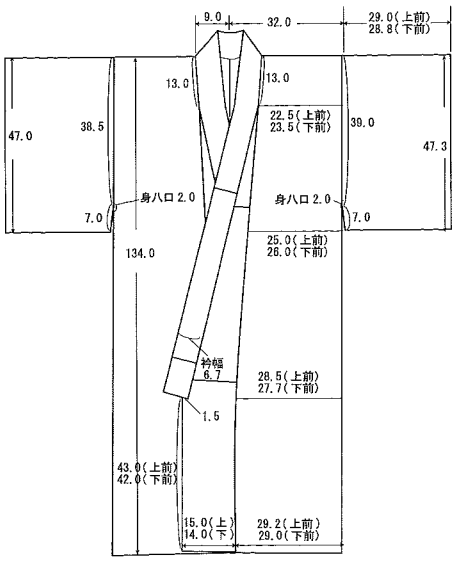
表地（身衣）拡大（50倍）



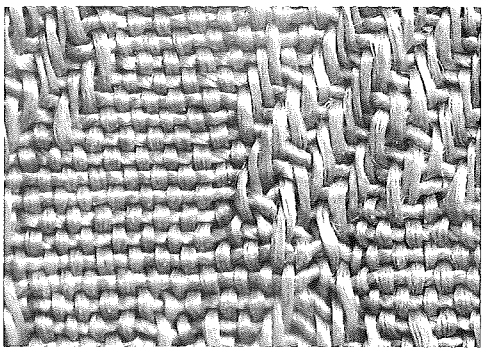
表地（衽）拡大（50倍）



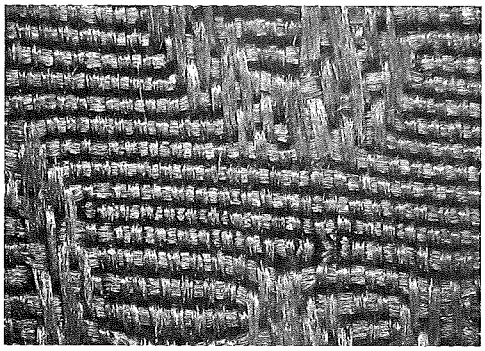
表地（下前衽）拡大（50倍）



表地（下前衿の一部）拡大（50倍）



裏地（身頃）拡大（50倍）



裏地（衿裏など）拡大（50倍）

表地は四種類の裂を用いる。

身頃には、経７枚繻子地に地緯１越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、浅葱、青、萌黄、黄、濃緑、金茶、紅の平糸を用いる。龍の鱗や宝など文様の一部には、撚金糸を地絡で半越に、２本一揃えで織り入れる。金糸は紙胎に金箔を貼り付ける。白の絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。

左右衽には、次の２種の裂を接ぎあわせる。１つは濃茶五枚繻子地に地緯２越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、青、紺、薄黄、黄、薄茶、茶、濃緑、朱、赤の平糸を用いる。文様の一部には、撚金糸を地絡で全越に、２本一揃えで織り入れる。金糸は紙胎に金箔を貼り付ける。白の絹糸を芯とし、蛇腹に巻き付ける。もう１種類は、濃茶平織地に地緯１越毎に絵緯糸を織り入れて文様を表した平地浮織物である。地は２本引揃えの経糸に、太い緯糸である。絵緯糸は、白、青、紺、黄、茶、緑、朱、赤の平糸を用い、地経で押さえる。

下前衿部分は、青地の繻子地浮織物である。

裏地は２種類の裂を用いる。身頃には、黄紗綾地牡丹唐草文裂を用いる。平織地に経４枚綾で牡丹唐草文様を表した紗綾である。衿裏および左右両前身頃の一部には、海松色地菊唐草文平織裂を用いる。平織地に経糸を浮かせて文様を表した浮織物である。また、裏地や両外袖中央に、尚家家紋を縫いつける。薄黄平織裂に三つ巴を白抜きにし、墨で輪郭を書いた家紋を円形の紋の形状に合わせて切り取り、縫いつけたものである。

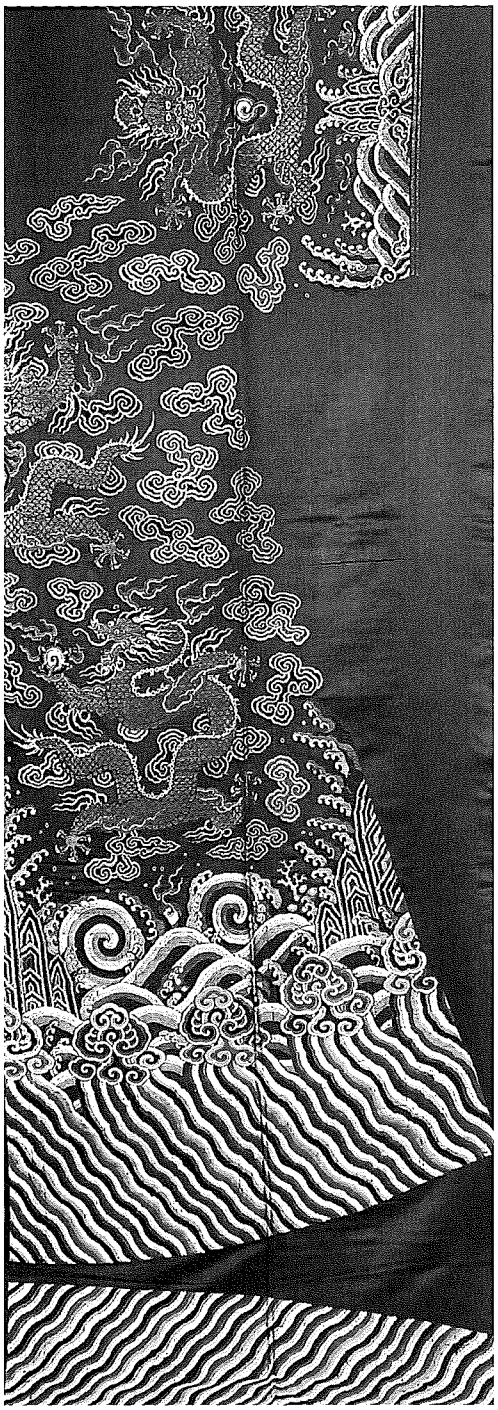
袷仕立。垂領。袖下を縫い合わせず大袖とすることや、衿下が短いことからゆったりと着用する表着として用いられたと考えられる。元々は異なる仕立のための裂を使用しているため、身頃と類似する文様の別裂を部分的に接ぎ合わせる。文様は、背面中央の正面を向いた正龍の下方に、それを仰ぎ見る２匹の龍を表し、背景には上方に雲を、下方に剣山と波濤を表す。袖肩山には、正龍を左右それぞれ１匹表す。龍の間に蝙蝠や雲、花折枝文様を表すほか、法螺や銭、珊瑚などの吉祥文様も表す。背面中央に描かれている正龍の顔面が縫い詰められているのが不自然であり、文様全体が背面に収まるように背縫いで調整したように見られる。

袖裏には尚家家紋である三つ巴紋が切り付けられる。裏地に染めたものではなく、元は別の裂に施されていた家紋のみを切り抜いて縫い付けたものである。王家家紋をわざわざ袖裏地に切り付けた理由は不明である。

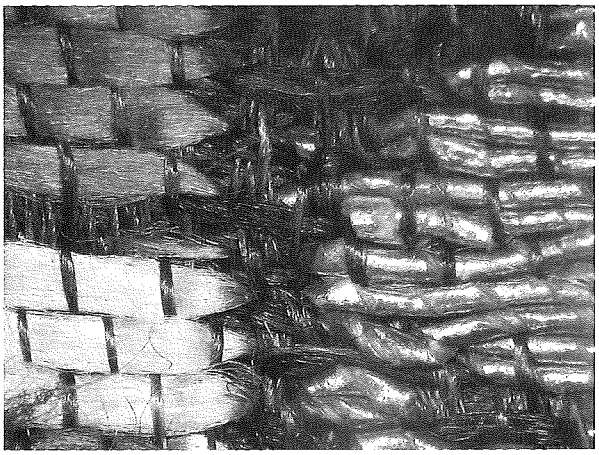
明末～清時代の裂を生かして和装様に仕立てた王妃衣裳として伝わった。

大嶺チヨ姑（大嶺カメ：1865年生）の旧蔵品。

6　青地龍瑞雲嶮山模様繻珍裂（青地龍瑞雲嶮山模様繻珍裂）



登記番号：230307（仮）
受 入 年：2011年３月
受理次第：寄贈（古波蔵保男・那覇市在）
寸　　法：長さ269.0 幅76.0
布　　幅：片方裁ち切りのため、計測不明
素　　材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙）
織 技 法：７枚繻子地縫取織
織 密 度：経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪龍、彩雲、海水江崖、如意雲、
　　火炎宝珠、宝珠、珊瑚など



表地拡大（50倍）

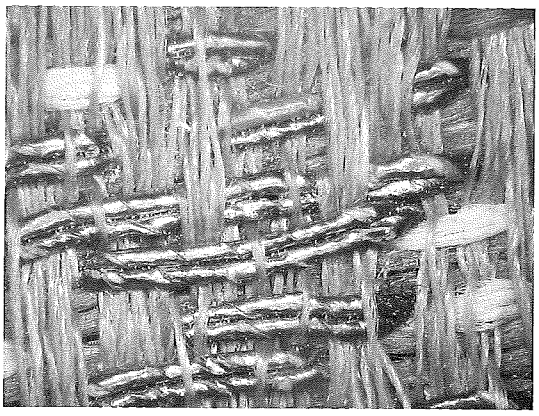
表地は経７枚繻子地に地緯２越毎に絵緯糸を織り入れ、地絡で押さえた繻子地の縫取織（絵緯糸を必要な部分にのみ織り入れ文様を表したもの）である。絵緯糸には、白、青、紺、赤、紫、黄、茶、緑、萌黄などの平糸を用いる。龍文と火炎宝珠などに撚金糸を地絡で全越に２本一揃えに織り入れる。金糸は、紙胎に金箔を貼り付ける。赤の絹糸を芯とし、蛇腹に巻く。龍の眉根と正面龍の腹部の一部に、撚銀糸を地絡で全越に１本ずつ織り入れる。銀糸は紙胎に銀箔を貼り付ける。黄の絹糸を芯とし、蛇腹に巻く。裏地はない。

文様は、資料２、３、５と類似するが、龍文の周囲には隙間なく彩雲が表され、コウモリや天蓋、双魚などは表されない。また、波文や裾の如意文が大きく、形式化された表現である。

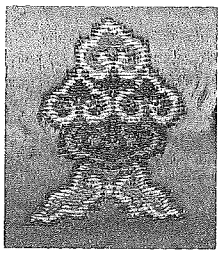
清時代末と考えられる衣裳用の裂地である。衣裳に仕立てる形状に文様を施す。片側は織耳である。裂の上下が裁断されており、半身の１枚半分と半身の上部袖分までが現存する。

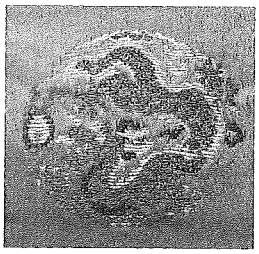
鯨岡阿美子（服飾研究家／1922～1988）旧蔵

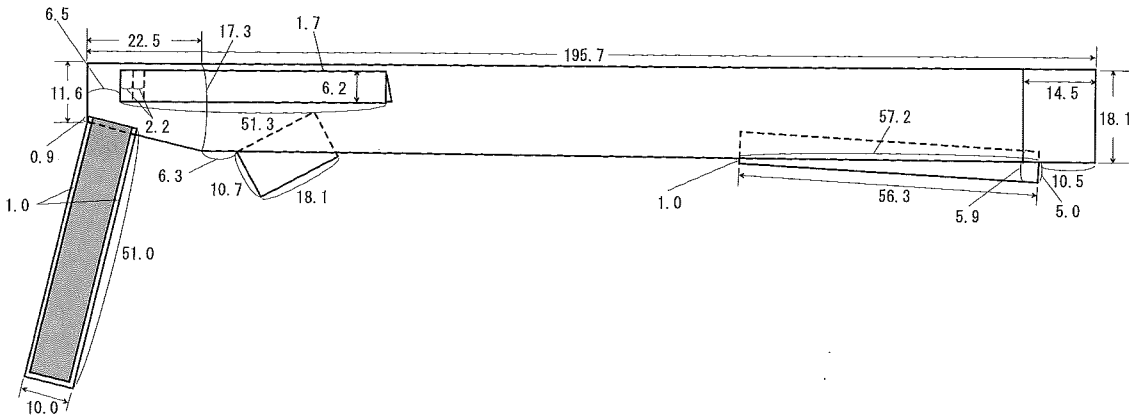
7　朱珍帯



登記番号：寄託
受 入 年：1974年８月
受理次第：寄託（沖縄県立図書館）
寸　　法：長さ195.7　幅18.1
表地素材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙）
織 技 法：表地　８枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：表地　経120、緯40（ヵ）
文　　様：五爪丸龍文、如意文を交互に配置し、横一列とする。一定間隔で列文様の繰り返し。
付　　属：紙札１







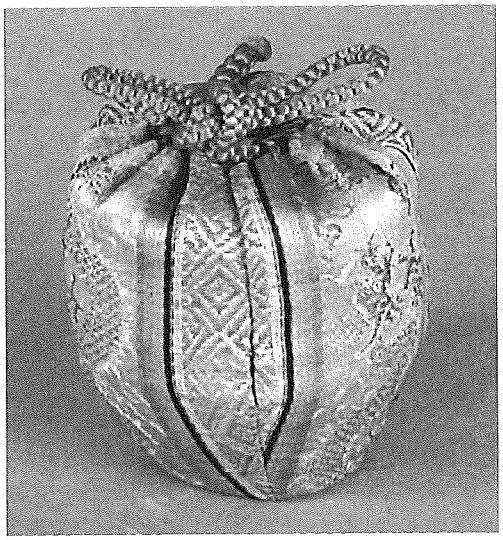
表地は八枚繻子地に、地緯１越毎に絵緯糸を織り入れて地経で押さえた繻珍である。絵緯糸には白、青、浅葱、縹、赤、黄、萌黄の平糸を用いる。龍文に撚金糸を地絡で全越に、２本一揃えで織り入れる。金糸は紙胎に金箔を貼り付ける。白の絹糸を芯とし、蛇腹に巻く。文様を表す絵緯糸のうち、茶糸のみ撚糸で、２本ずつ織り入れ、地絡で押さえる。

裏地は縹地平絹を用い、表地と裏地の間に木綿布芯を入れる。

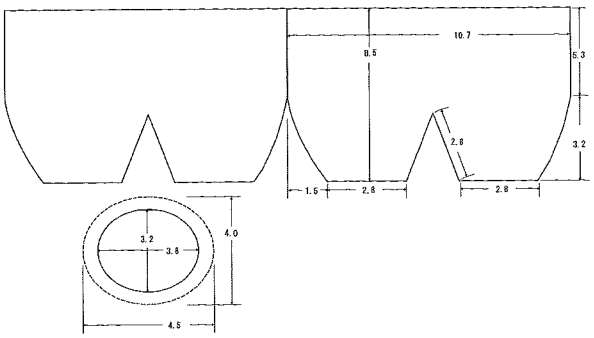
琉装用の男性用略式仕立帯。木綿布の芯を入れた袷仕立て。多色の色糸を織り入れ、部分的に金糸を用いる。清時代の遺品に側面を向いた蟒の体を円形に形作った寸蟒文と、如意文を交互に配置した文様裂（寸蟒文粧花緞、北京故宮博物院蔵）があり、本帯の文様形式と類似する。遺品では、文様の縦間隔が狭く、間に花折枝文を散らしているものもあるが、本帯裂は文様の縦間隔が広く形式的な文様表現であることから、清時代19世紀頃かと考えられる。清時代遺品の文様裂は、衣料や敷物用に用いられたものであり、本帯反物として入手した裂を帯に仕立てたものか。

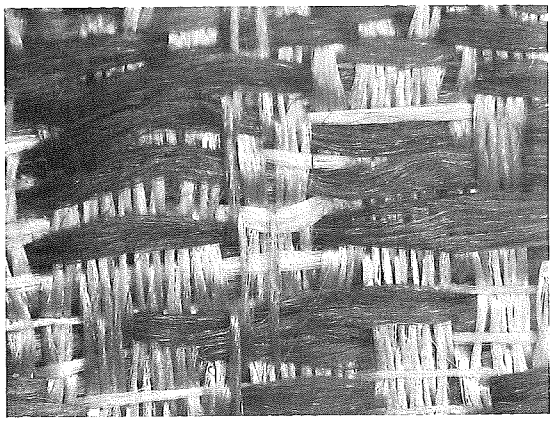
東恩納寛惇（1882～1963）旧蔵。浦添御殿旧蔵品と伝えられる。

8　独楽型茶入の仕覆



登記番号：1837
受 入 年：1958年６月
受理次第：購入
寸　　法：縦8.5　横10.7
表地素材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸）
織 技 法：表地　５枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：表地　経120、経30（ヵ）
文　　様：四爪龍文、花唐草を交互に配置し、横一列とする。龍文列の間に雷文と菱を配し、それを繰り返す。





表地拡大（50倍）

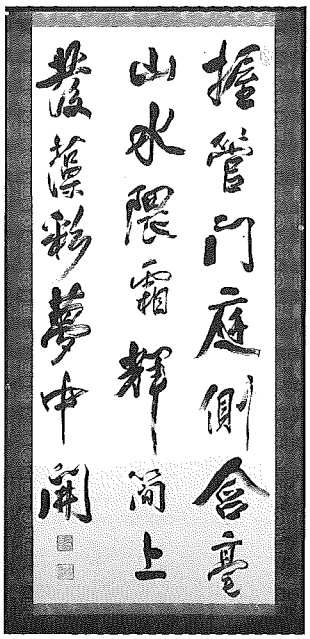
表地は、経５枚繻子地に地緯１越毎（ヵ）に絵緯糸を織り入れ、地経で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、紅、緑の平糸を用いる。部分的に、白、浅黄、水色、紺、紅、黄の経糸を織り入れ、縞文様を表す。裏地は白の経糸、紺の緯糸を用いた平織裂。

茶入れの仕覆として仕立てられ、金茶の組紐を付す。文様は、四爪龍と花唐草、縞の間に雷文と菱、卍字を表す。本仕覆は、茶入れのために現代に仕立てられたもので、もとは別用途の裂であったと考えられる。

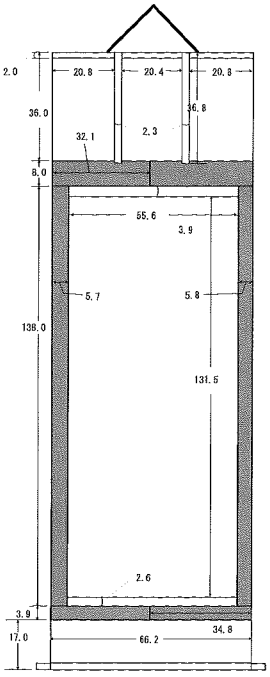
茶入は尚順（尚泰四男）旧蔵。

久米島喜久村家所蔵の大帯、東任鐸画像（注３）に描かれる帯と文様が類似。

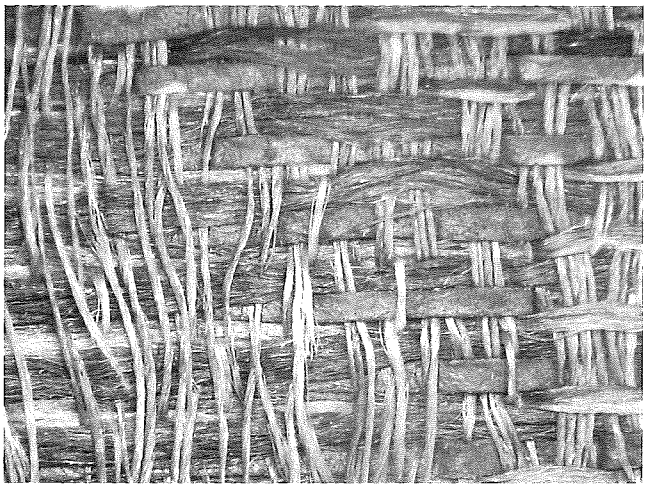
9　尚育王書軸物「五言絶句」の表装裂



登記番号：2102
受 入 年：1961年３月
受理次第：寄贈
寸　　法：全体（縦335.9　横71.0）
　　本紙（縦131.5　横54.4）
　　裂上（縦　8.0　横66.2）
　　裂下（縦　3.9　横66.2）
　　裂左（縦138.0　横 5.7）
　　裂右（縦138.0　横 5.8）
裂 素 材：経（絹Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、撚金紙）
織 技 法：裂　６枚繻子地浮織（繻珍）
織 密 度：経100、緯40（ヵ）
文　　様：蜀江文



※■部分に繻珍が使用されている



繻珍裂拡大（50倍率）

琉球第18代国王である尚育王の書の掛幅表装裂のうち、中廻しとして用いられている裂である。なお、風帯、天地、一文字は新補裂である。

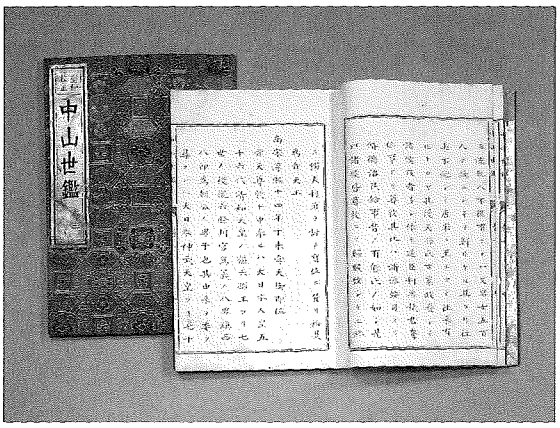
経６枚繻子地に地緯２越毎に絵緯糸を織り入れて、別絡糸で押さえた繻珍である。絵緯糸には、白、紺、紅の平糸を用いる。部分的に金糸を織り入れる。金糸は平金糸で、紙胎に金箔を貼り付けるが、現状は部分的に剥落する。金糸は全越に織り入れ、別絡で押さえる。絵緯糸と金糸を押さえる糸は薄黄の細糸である。

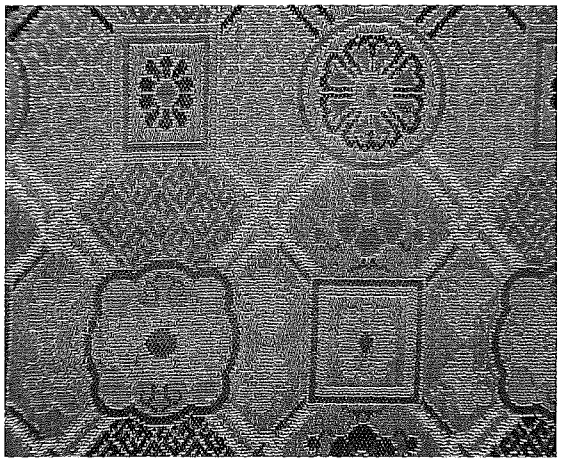
文様は、花文入りの方形、円形、八稜形の文様を菱で繋ぐ。菱の中を七宝、卍字で充填したもののほか、部分的に五弁花、蝶文を表す。

次掲の資料10～12の錦と同じ文様であるが、地組織が異なる。また、尚育王の御後絵に描かれる衣裳の袖口および裾周りの裂文様と類似する。

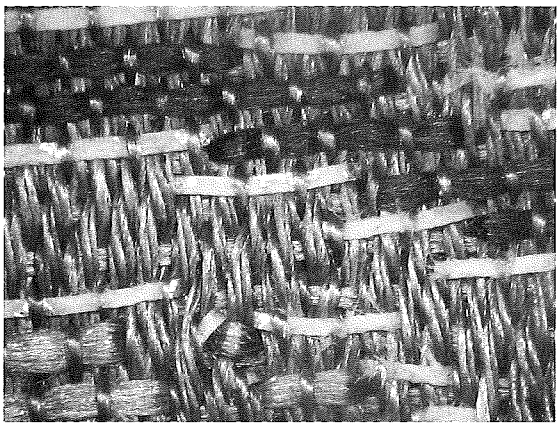
神山家旧蔵ではないかと思われるが、詳細は不明。

10　中山世鑑：緑地蜀江文様錦



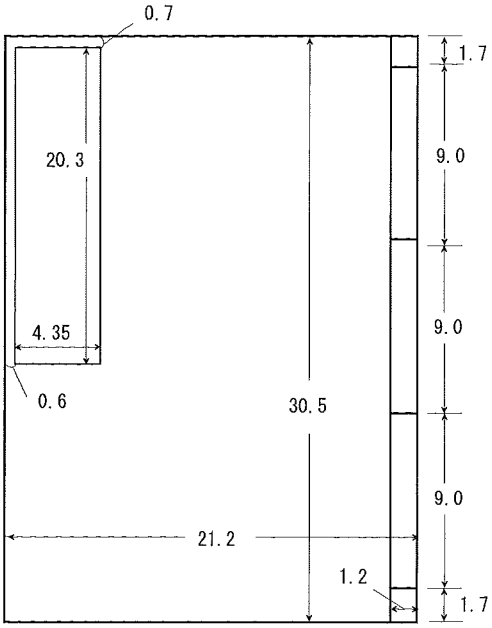


表紙文様部分



表紙拡大（50倍）

登記番号：966
受 入 年：1953年５月
受理次第：返還（米国政府）
寸　　法：縦30.5　横21.2
冊　　数：６
素　　材：経（絹双糸Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、平金糸）
織 技 法：経３枚綾浮織物（錦）
織 密 度：経66、緯15～16（ヵ）
文　　様：蜀江風文様。円、四角、菱文の中に、花、卍、七宝、五弁花、蝶文を充填する。

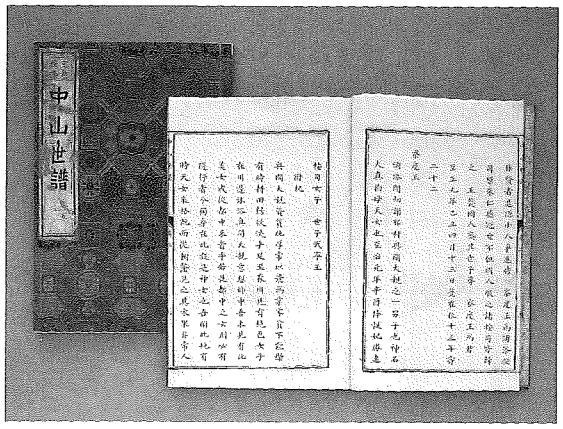


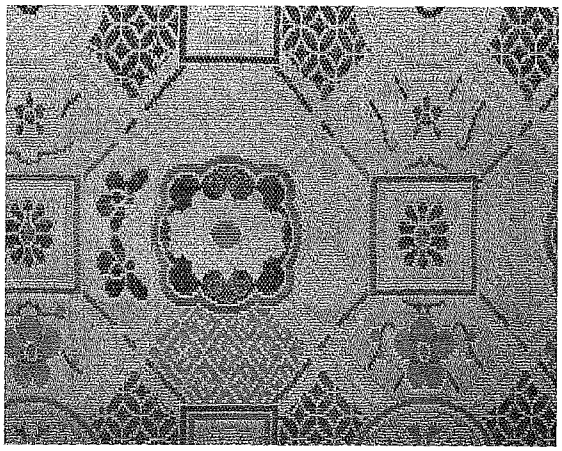
表は目の詰まった緑地経３枚綾に絵緯糸と金糸を織り込んだ錦である。絵緯糸には、水色、縹、紺、黄、白の平糸を用いる。金糸は平金糸で、紙胎に金箔を貼り付けたものであるが、現状は金箔が剥落する。金糸は全越に織り入れ、地絡で押さえる。文様は、資料９とほぼ同じである。

装幀は袋綴。表左上に金紙の題箋を貼る。綴糸は金茶撚糸を２本用いる。

1974年11月、沖縄県立博物館の地階の特設修理室にて、水貼りで、汚れを除く修理が施されている。

11　蔡鐸本中山世譜：緑地蜀江文様錦

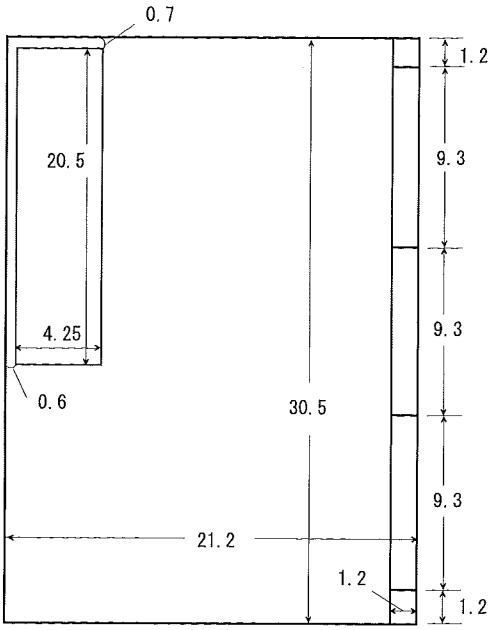




表紙文様部分

表紙拡大（50倍）

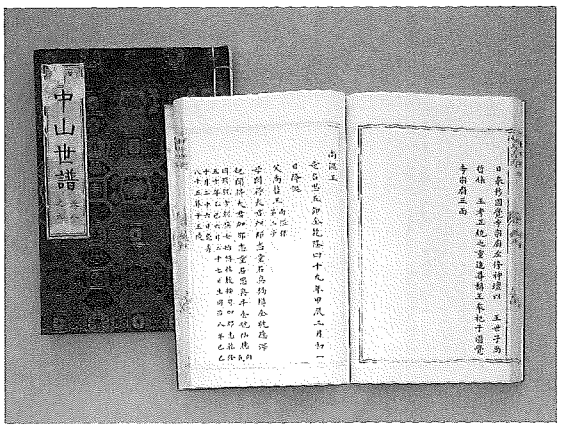
登記番号：967
受 入 年：1953年５月
受理次第：返還（米国政府）
寸　　法：縦30.5　横21.2
冊　　数：７
素　　材：経（絹双糸Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、平金糸）
織 技 法：経３枚綾浮織物（錦）
織 密 度：経66、緯15～16（ヵ）
文　　様：蜀江風文様。円、四角、菱文の中に、花、卍、七宝、五弁花、蝶文を充填する。

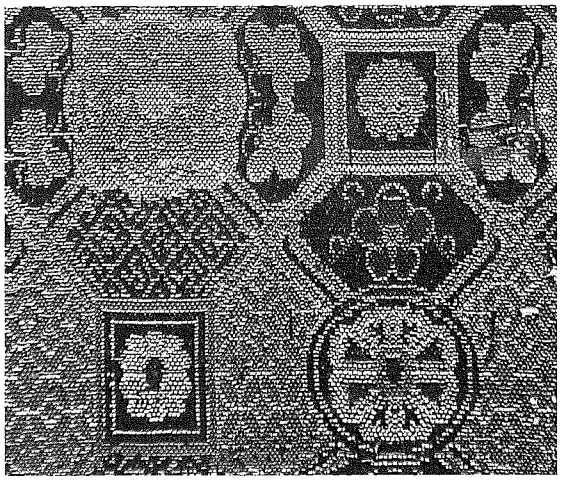


資料10とほぼ同じ裂である。表は目の詰まった緑地経３枚綾に絵緯糸と金糸を織り込んだ錦である。絵緯糸には、水色、縹、紺、黄、白の平糸を用いる。金糸は平金糸で、紙胎に金箔を貼り付けたものであるが、現状は金箔が剥落する。金糸は全越に織り入れ、地絡で押さえる。文様は、資料10と同じである。

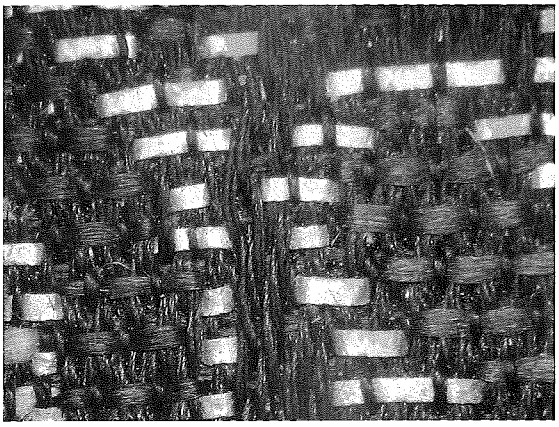
1974年11月、沖縄県立博物館の地階の特設修理室にて、水貼りで、汚れを除く修理が施されている。

12　蔡鐸本中山世譜：紺地蜀江文様錦



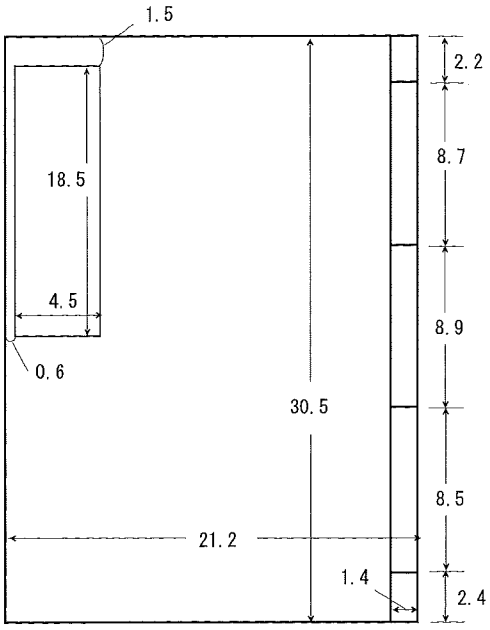


表紙文様部分



表紙拡大（50倍）

登記番号：968
受 入 年：1953年５月
受理次第：返還（米国政府）
寸　　法：縦30.5　横21.2
冊　　数：12
素　　材：経（絹双糸Ｚ撚）　緯（絹平糸）
　　絵緯糸（絹平糸、平金糸）
織 技 法：経３枚綾浮織物（錦）
織 密 度：経66、緯15～16（ｃｍ）
文　　様：蜀江風文様。円、四角、菱文の中に、花、卍、七宝、五弁花、蝶文を充填する。



表は目の詰まった紺地経３枚綾に絵緯糸と平金糸を織り入れた錦である。絵緯糸には、水色、縹、紺、黄、萌黄、濃緑の平糸を用いる。金糸は平金糸で、紙胎に金箔を貼り付け、金糸は全越に織り入れ、地絡で押さえる。金糸の残存状態が資料10、11よりも良い。表紙下部に裏から同裂をあてて補修した跡が見られる。また、別途同裂の断片が同梱される。文様は、資料10、11とほぼ同じであるが、個々の文様が大きく、形式化している。

1973年11月、沖縄県立博物館の地階の特設修理室にて修理。 12冊のうち１冊は以前に修理済み。本紙は裏打ちを施し、バラバラになっていた表紙を直す。